

昭和
軍閥

勃興篇

昭和軍閥／勃興篇／立野信之





昭和軍閥 勃興篇

昭和38年8月10日 第2刷発行 定価290

著者 立野信之

東京都文京区音羽町3-19

発行者 野間省一

東京都板橋区志村町5

印刷所 凸版印刷株式会社
(製本 大成株式会社)

発行所 東京都文京区 株式会社 講談社
音羽町3-19

著丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

© Nobuyuki Tateno 1963

目

次

第一章	バーデン・バーデンの密約	七
第二章	派閥闘争	一六
第三章	軍縮の嵐	二五
第四章	田中内閣	三三
第五章	東方会議	四五
第六章	満州某重大事件	五七
第七章	三月事件	六九
第八章	カンタイタノム 「トメオトコ」	八六
第九章	満州事変	九五
第十章	不穏計画	一〇三

第十一章	十月事件	一一一
第十二章	新軍閥	一二七
第十三章	一人一殺	一三八
第十四章	問答無用	一四八
第十五章	ゴースト・クラブ事件	一六〇
第十六章	陸相留任劇	一七〇
第十七章	十一月事件と怪文書	一八五
第十八章	天皇機関説	二〇一
第十九章	教育総監罷免	二一二
第二十章	相沢事件	二三一

装幀・レイアウト
大森忠行

昭
和
軍
閥

勃
興
篇

第一章 バーデン・バーデンの密約

一

南部ドイツに百五十^きにわたって連なっている山脈「黒い森」のふもとにバーデン・バーデンとよばれる温泉地がある。バーデンというのはドイツ語で「湯あみする」という意味である。ローマ時代から知られた温泉で、当時の浴場跡も残っている。ドイツ第一の温泉保養地で、付近の森や湖が美しいので、景勝の地としても知られている。

大正十年十月下旬のことである。

この景勝の温泉地に、三人の日本人が宿をとった。いずれも三十六、七歳、中肉中背で、それぞれ体に合った洋服を着こなしていたが、帽子を取ると三人ともイガグリ頭なので、日本の事情に通じている者が見れば、軍人だな、とすぐわかる。それはスイス駐在武官の永田鉄山少佐、ソ連駐在武官の小畑敏四郎少佐、いま一人は欧米

視察旅行途次の岡村寧次少佐であった。

三人は士官学校第十六期生——永田と小畑は陸大でも同期で、そろって軍刀組であるが、岡村は二年おくれで陸大を出た。永田はドイツ語、小畑はロシア語、岡村は中国語と、それぞれ専攻は違っていたが、三人は無類の仲よしで、序列も永田を先頭に並行してきたのだった。

この三人の「仲よし」がバーデン・バーデンに集まったのは、しかし最初からそういう約束があつてのことではなかった。

岡村少佐がそれまでの中国駐在武官の任を解かれて、慰労休暇の意味で欧米視察を命ぜられ、アメリカを経て欧州へ渡り、ベルリンに赴くと、そこにソ連駐在武官の小畑少佐が滞在していた。小畑はソ連駐在を命ぜられて日本を出てきたものの、当時日本はまだシベリア出征中で革命ロシアと敵対関係にあつたので、ロシアに入国できないまま、ベルリンに足をとどめていたのである。

小畑はすることがなくて退屈していたので、岡村の顔を見るなりいった。

「いいところへきた。明日か明後日、バーデン・バーデンに案内しよう……永田も呼ぼうじゃないか」

永田はスイスのジュネーブにいる。が、そこからジュ

ラ山脈ぞいに北上し、国境を越えればそこはドイツ領の「黒い森」山脈であり、そのふもとがバーデン・バーデンである。距離もベルリンから行くよりは、はるかに近い。

岡村の旅程には、別にバーデン・バーデンへ行く予定はなかった。が、岡村は別に急ぐ旅ではないし、きいてみれば景勝の地でドイツ第一の温泉休養地だというから、八月に日本を出発して以来二ヵ月にわたる旅のアカも落としたかった。そのうえ士官学校時代からの「仲よし」三人がそのような景勝の温泉地で相会することができるとはそれに越したことはない。

「賛成だが、永田を呼ぶのをどうする？」

「電報で呼ぼう」

小畑はさっそく旅行案内書をしらべてバーデン・バーデンの宿を定め、ジュネーブの永田に電報を打った。

中一日おいて、小畑と岡村は朝早くベルリンを汽車でたち、夜の十時すぎにバーデン・バーデンの宿についた。

すると永田はすでに先着していて、間隔のひらいた眼を大きくかがやかし、

「やあ」

と、二人を迎えた。

永田鉄山は信州の産である。頭脳は人並すぐれていたが、いわゆる秀才型ではなく、酒は飲む女遊びもする、といった風で、あまり勉強している様子も見えないが、それでいて、歩兵科ではいつも首席で通した男である。

小畑敏四郎も頭脳緻密で、戦術では群を抜いていて、若くして「大家」と称されていた。土佐の産で、祖先は長曾我部氏の遺臣だった、という。

「——だから、おれの祖先は、山内氏が土佐の藩主となつて以来、その祿を喰むのをいさぎよしとせず、郷土として代々受けついできた」

小畑は人にそう話したが、その血は小畑にも流れていて、なかなかの硬骨漢である。

小畑の父美稲は明治維新の際に活躍した功勞で男爵を授けられ、兄大太郎も男爵議員として貴族院方面で活躍している。

岡村寧次は九代もつづいた旗本の家に生まれた江戸っ子で、比較的に酸いも甘いも知りつくした通人である。それだけに調和性に富んでいて、秀才永田とカミソリ小畑の間にあって、楔の役目になるには打ってつけの男だ。

その楔の役目の岡村が、欧米視察旅行の途次、ドイツへやってきた、ときいては、永田は何を置いてもバーデン・バーデンへ駈けつけざるを得ない。同期生というのは、親兄弟よりも深い交りを結ぶものだ、といわれているが、まして異境の空の下で「仲よし」三人が相会したのだから、よけい親密の度を増した。

その夜、三人はおそくまで酒を飲みながら四方山ばなしに花を咲かせた。永田と岡村は酒は強いが、小畑は弱い。が、それでも話の相手になるには事は欠かない。

話は当然陸軍の当面しているシベリア出兵問題や、軍縮問題や、陸軍部内の人事の問題にまで及んだ。

大正十年——といえば、平民宰相とよばれた原敬内閣の末期で、陸軍は「理由のない出兵」といわれたシベリア出兵の処理で苦境に陥っていた。日本を誘って共同出兵をしていたアメリカは、その非を悟ると、大正九年一月にさっさと撤兵したのに、日本は「居留民の保護」と「シベリア政情の安定」という虚名にこだわって撤兵の時機を失い、「敵」のいないシベリアの寒空の下で、将兵をいたずらに凍傷に晒らしているのである。

「出先軍と参謀本部の一部の将校連中とが、セミヨーノフの白軍を援助した謀略に未練を残しているんだ、とい

う説があるが……」

と永田がたずねた。

「おれも、日本を出るとき、それをきいたが、セミヨーノフなんかに未練を残したって、それはムダの骨頂……いい加減に見切りをつけたほうがいい」

と、小畑がいった。

「おれもそう思うんだ」

と、永田が肯いた。

「世間では上級将校の間に論功行賞の欲望があつて、それで師団を交替で出征させてるんだ、という説がある」と、岡村がいった。

そのとほげたいい方に、永田と小畑はともに失笑したが、笑いが納まると、永田が慨然とした顔でいった。

「軍も、世間からそういわれるようになったら、おしまいな……陸軍の威信、地に墜ちたり、だ」

実際、シベリア出兵は不評判で、世間からは種々様々な疑惑の眼で見られている。それというのも、政府や軍部のシベリア出兵に対する態度があいまいで何の見通しもたずに、作った名目にこだわって、ただ行きあたりばつたりに撤兵の時機をおくらせているからである。しかも三年間に九億円という巨大な国費をムダにしてしま

つたのだ。国民が疑惑の眼をもって見るのも、無理はない。

「――無用のシベリア出兵に使った金を、軍備の近代化に使ったならば?」

というのが、永田や小畑や岡村の共通した思いであった。

だから、

「――撤兵は、一日でも早ければ早いほうがいい」

というのも、三人の一致した結論であった。

実際、外国に来てみると、第一次欧州大戦の経験にもとづいた各種武器の飛躍的な進歩とそれに伴う戦術革命とは、眼をみはらせるものがあつた。大戦の最初にドイツ軍は新兵器タンク（戦車）を使用して、全世界の耳目をおどろかせたが、それにつづいて毒ガスが現われ、火焰発射器、バズーカ砲、大口徑砲、長射程砲、装甲自動車、自動車砲、高射砲など、日本の陸軍がまだ見たこともない新兵器が続々と登場して、いわゆる科学戦時代にはいつて居り、戦術もそれにつれて一変しているのである。

だのに、日本は無用のシベリア出兵にうつつを抜かし、将来、ロシアと中国二方面策戦」を想定して十三

個師団を追加し、都合三十八個師団の拡張を目論んだりしている。つまり何事も「数」でこなす式の旧思想にとらわれているのである。言葉の上では新武器や科学兵器を唱えてはいるが、歩兵の主要武器は相変わらず日露戦争時代からの三八式歩兵銃であり、機関銃の増配や大口徑砲の整備など思うに任せない状態であつた。つまり歩兵の突撃に最後の勝利をかけた日露戦争時の戦術から、少しも進歩していない証拠である。

アメリカはさきごろ世界列強に呼びかけて、軍縮会議をワシントンで開催することを提案した。第一次世界大戦の跡始末として、これはきわめて妥当な提案である。何年も戦争がつづいたあとでは、だれしも平和を願う氣持がつよい。

だから、軍縮は必至と見て、欧米各国では軍隊の装備を「数」よりも「質」に重点を置き替えている。だのに、日本は旧態依然たる「数」の概念にとらわれていて、装備や兵器の近代化など、何一つ手をつけていない。世界のすう勢に、一人逆行しているようなものだ。

そういう日本の姿は、外国に来てみると、手に取るようによくわかる。欧米の軍備の近代化が異常な進歩をとげているのを眼のあたりにしているだけ、よけいよくわ

かる。

「――陸軍上層部の石頭を切り替えにや、どうにもならん」

「――このままでは、日本の陸軍は三流、四流に落ちてしまふ」

永田らは、思うだに齒がゆくてならないのだった。

二

当時、陸軍首脳部は、田中義一が尼港事件の責めを負って辞任したあと、陸相山梨半造、次官尾野実信、軍務局長菅野尚一、参謀総長上原勇作、次長菊池慎之助、教育總監秋山好古、本部長児島惣次郎、といった顔ぶれであった。

山梨陸相は相模の出身であるが、田中義一の分身のようなものだから、明らかに長州閥系である。上原参謀総長は鹿児島藩の出身であるから、これは薩州閥のチャキチャキである。秋山教育總監は伊予の出身で、清廉な武將気質の人であるから、派閥臭はない。それに教育總監は大臣のように政変に左右されることのない地味な存在だから、あまり眼立たない。

こう見てくると、陸軍の三長官のうち、二長官は薩長

閥によって占められていることがわかる。現に上原は正四年十二月に参謀総長に就任して以来、在職六年に及んでいるが、まだその地位から退きそうもない。山梨の背後にいる田中は、陸相の椅子こそ山梨に譲ったものの、なかなかの仕事師であるから、いつまた陸相にかえり咲かないとも限らない。つまり陸軍部内は、薩長出身の二人の実力者によって壟断されている、といっても過言でないわけである。

だが、陸軍部内のこうした現象は、いまにはじまったことではない。いわば明治維新の名残りのようなものである。薩長にあらざるば人にあらず、といった風習が、いまだに幅を利かせているのである。

「――このバカバカしい弊風を破らないことには、日本の陸軍はよくならない」

とは、誰しもが一応慨嘆するところであるが、それならばその弊風をやぶるには、どうしたらよいか、となると、誰にもこれという名案はない。それに下手に楯を突けば、左遷されるか、待命を覚悟しなければならぬので、めったなことではできない。

といって、その弊風を破らないことには、薩長出身以外の者は、いくら頭脳がよくても、戦術に長じていて

も、上がつかえていて、自分の才能を発揮することができな

永田、小畑、岡村の三人は、東京にいた時分も、よく陸軍省の馬場などで桜の木にもたれて、薩長専横に対する不満をブチまけ合ったものだ。しかし、それは人眼もある

ので、大方は立ちばなし程度にすぎなかった。だが、いまは異境の空の下で、三人の会合を怪しむ日本人は一人も居ない。その解放感と酒の酔いも手伝って、岡村がしきりにいった。

「とにかく、陸軍三長官を薩長閥にぎっている弊風をやぶるには、一人でもいいから、薩長出身以外の者を出すことだ。それには陸軍大臣なり、教育総監なりは、われわれ若い者が選んで推挙する、という慣習をつくらなければダメだ」

「同感だな」

と、小畑がいった。

「具体的には、どうするか」

と永田がきいた。

「一人でも、二人でも、同志の士を獲得して、その問題について、寄りより話し合う。そうしてだんだんに下地をつくって行けば、やがては所期の目的を達せられるよ

うになるだろう」

「それなら、おれも同感だ」

と、永田は大きくうなずいた。

元来、永田鉄山は徒党を組んで陰謀をはかるなどということは、好まない性質である。そんなことは小人のなすことだ、と思っている。だが、岡村寧次の提案は、ただの陰謀ではない。日本の陸軍を近代化するためには、ぜひとも通らなければならない過程として、それはスジの通った提案である。

「同志を獲得する、といっても、よほど慎重にやらんと、曲解されたり誤解されたりして、状況をかえって悪くするおそれがあるぞ」

永田は注意した。

話がたんそうと決まれば、頭脳が緻密に回転するのは永田らしい。

「もちろん、慎重にやる必要がある」

「それでは、取りあえず、誰々に働きかけるか」

永田と小畑と岡村の三人は、それぞれ思い思いのメンバーを挙げた。

そして三人の口の端にのぼったメンバーを一応書きとめると、

第十四期 小川恒三郎

第十五期 河本大作、山岡重厚

第十六期 土肥原賢二、板垣征四郎、小笠原数馬、磯谷

廉介

第十七期 東条英機、渡久雄、工藤義雄、松村正員

といった人たちであった。

だが、それらのメンバーは、厳密な意味での同志として選ばれたわけではない。ただ、それを挙げるなら、これも、といった風に、その場の思いつきとして三人の口の端にのぼったまでである。ただその中で三人の指名が期せずして一致したのは、一期下の東条英機一人だけであった。最初に口火を切ったのも岡村であった。

「東条……あの男はいい。同志としてやって行ける男だ」

永田が太鼓判を捺した。

東条英機は東京の生まれであるが、父の英教中將は南部藩の出身。陸軍大学が開設されたときに選ばれて入学し、ドイツ人教官メッケルに大いにその才能を推賞された人で、戦術の大家であった。日本の陸軍が、明治維新以来、山県有朋らの長州閥によって壟断されている現状をあきたりなく思い、上原勇作、宇都宮太郎、福田雅太

郎らと謀って打倒長閥の運動を起こしたが、志を得ずに、中將に昇進すると同時に待命となり、大正二年十二月、五十九歳で病死した。

東条英教中將のその志は、倅の英機にも伝わっている。同期生の中では、群を抜いて頭脳明敏、カミソリの綽名をもらっていたが、しかしその東条英機を支えているのは、何といっても父親から受けついだ叛骨精神であろう。

同志としての三人の指名が、期せずして東条英機に集まったので、岡村は欧米視察旅行から帰朝すると東条と連絡をとり、それを手がかりに同志獲得の線をひろげて行くことになった。

翌日は天気晴朗、すばらしい秋日和である。

だが、バーデン・バーデンの森は、樹木の葉が黄色くしなびているだけで、日本のように鮮かに燃える紅葉は見られない。

「何だ、つまらん……フランクフルトへ行って遊ぼうや」

永田がいい出した。バーデン・バーデンは純然たる休養地であそび女も居なければ、ロクな酒場もない。が、フランクフルトへ行けば、酒も女も、遊びに事は欠かな

い。

三人はバーデン・バーデンをあとにして、一路フランクフルトへ向かった。

岡村寧次少佐は、やがて欧州視察旅行から帰朝した。その帰朝歓迎会が偕行社で行なわれたが、バーデン・バーデンのホテルで永田少佐や小畑少佐らの口にはまった連中が何人も集まった。東条英機少佐ももちろん出席していた。

折りを見て岡村が東条を別室に引っ張って行き、バーデン・バーデンでの三人の申し合わせを打ちあけると、東条も異論なく、賛成した。

「じゃ、めばしい連中に、当たってみるか」

「何もクーデターを起こすわけではないから、そう急がんでもいい。そのうちに永田や小畑も任期を終えて帰ってくるだろうから、ボツボツ同志を獲得しておけばいい」

外地の駐在武官の任期は二カ年である。

その間に、ボツボツ同志を獲得して置こう、というのだから、これはのんきな話である。が、時代は正にそういうのんきな時代でもあったのだ。

そのうちに、大正十一年二月——桂太郎、仙波太郎と

ともに「陸軍三太郎」と呼ばれていた宇都宮太郎大將が、死んだ。

宇都宮は佐賀の出身。陸軍大学を出て、明治四十一年、大佐で参謀本部第一部長となり、つづいて第二部長、東宮御用掛を経て第七および第四師団長、朝鮮軍司令官、軍事参議官を歴補、立派に陸軍三長官になれる資質を持ちながら外回りばかりしていたのは、佐賀出身という闊外者だからである。

「闊外者のいい見本だね」

「まったく……」

岡村や東条らは、そう話し合ったものだった

その宇都宮太郎は、自分の晩年を予想してか、少佐の頃から郷党の後輩を集めて、一種の佐賀閥のようなものを作っていた、といわれる。佐賀は「武士道とは死ぬことと見つけたり」という葉隠の本場である。したがって青年の気風もはげしい。

宇都宮は、これを東京に持ち込み、葉隠精神をもって膝下に集まる青年将校を育成しよう、としたらしい。勢い郷党を中心としたものになったが、そのメンバーは武藤信義、真崎甚三郎、柳川平助、福岡の秦真次、香椎浩平、熊本の石光真臣、牛島貞雄、長崎の福田雅太郎、土